岡山県天神山文化プラザ企画展 TENPLA SELECTION 天プラ・セレクション Vol.93

大橋裕子展 まだ見ぬものたち

［会期］2020年9月1日〜9月6日［入場無料］
［時間］9時30分〜18時（最終日は16時まで）
［会場］岡山県天神山文化プラザ・第3・4展示室

大橋 裕子 Yuko Ohashi

1961 岡山県生まれ
1984 ノートルダム清心女子大学 家政学部 児童学科児童教育学コース(絵画コース専攻)卒業
岡山市内の企業に就職、絵画制作活動を一時休止
1999 絵画制作活動を再開
2016 倉敷芸術科学大学大学院 芸術研究科(通信制)美術専攻 油画系 修了
2019 倉敷市の公民館での絵画講師
現在、倉敷芸術科学大学大学院 芸術研究科 芸術制作表現専攻 博士後期課程 在籍中

□ 展覧会
2010 グループ展 赫展（倉敷市立美術館）［以後毎年］
2015 倉敷市美術展覧会（倉敷市立美術館）［以後毎年］
2016 第80回 新制作展（東京国立新美術館）
2019 第44回 全国大学版画展（町田市立国際版画美術館／東京）
2020 天プラ・セレクションvol.93 大橋裕子展「まだ見ぬものたち」（岡山県天神山文化プラザ）

□ 主な賞歴
2004 第55回 岡山県美術展覧会 県展賞［以後同賞受賞:2005、2007、2009、2010］
2012 第63回 岡山県美術展覧会 山陽新聞社賞
2014 第67回 関西新制作展 新作家賞［同賞受賞:2019］
2015 第66回 岡山県美術展覧会 県展特別賞

■ 出品一覧

タイトル / 素材 / 技法	制作年 / サイズ(cm)
見えてきたかたち	2020
麻布（左2枚）、カンヴァス（右）/油彩	各162 × 130.3・3枚組
記憶	2020
トレーシングペーパー、鉛筆、木炭、墨、胡粉/ドローイング	220 × 1100・2層
囁き 1・2・3	2020
木製パネル、鳥の子、薄美濃紙もみ紙（胡粉、墨）、トレーシングペーパー、銀箔、鉛筆 /ドローイング	各91 × 72.7・3点
澄む	2020
木製パネル、鳥の子、薄美濃紙もみ紙（胡粉、墨）、水干絵具、岩絵具、染料、胡粉	180 × 270
襞	2020
麻布 / 油彩	116.7 × 91
まだ見ぬものたち-予感 I・II	2019
カンヴァス / 油彩	各162 × 130.3・2点
生	2019
カンヴァス / 油彩	116.7 × 116.7
透けるかたち	2019
麻布 / 油彩	53 × 45.5
かたちの向こう	2018
麻布 / 油彩	53 × 45.5
南国の実	2019
トレーシングペーパー、鉛筆 /ドローイング	46.5 × 34
南国の風-ドローイング	2019
トレーシングペーパー、鉛筆、木炭 /ドローイング	67 × 61.5
南国の風 − 1・2	2019
紙 / 銅版画、多版多色刷	各63 × 43・2点
夏 − 1・2・3	2020
紙 / 銅版画、多版多色刷	各63 × 43・3点
the other side	2020
紙、銀箔 / 銅版画、多版多色刷	10 × 10
flow	2020
紙 / 銅版画、1版多色刷	7 × 13
追憶	2020
紙 / 銅版画、多版多色刷	6.6 × 13
line	2020
紙 / 銅版画、多版多色刷	6.6 × 13
Gerbera	2020
紙 / 銅版画、1版1色刷	15 × 18
YUZU・YUZU − 2・3	2019
紙 / 銅版画、多版多色刷	各17 × 31.5・3点
nuts-yellow	2019
紙 / 銅版画、多版多色刷	13 × 10
Tree	2019
紙 / 銅版画、1版多色刷	6 × 4.6

■ 謝辞（敬称略）

展覧会の開催にあたり、下記の機関・関係者の皆様に、多大なご協力を賜りました。ここに記し感謝の意を表します。

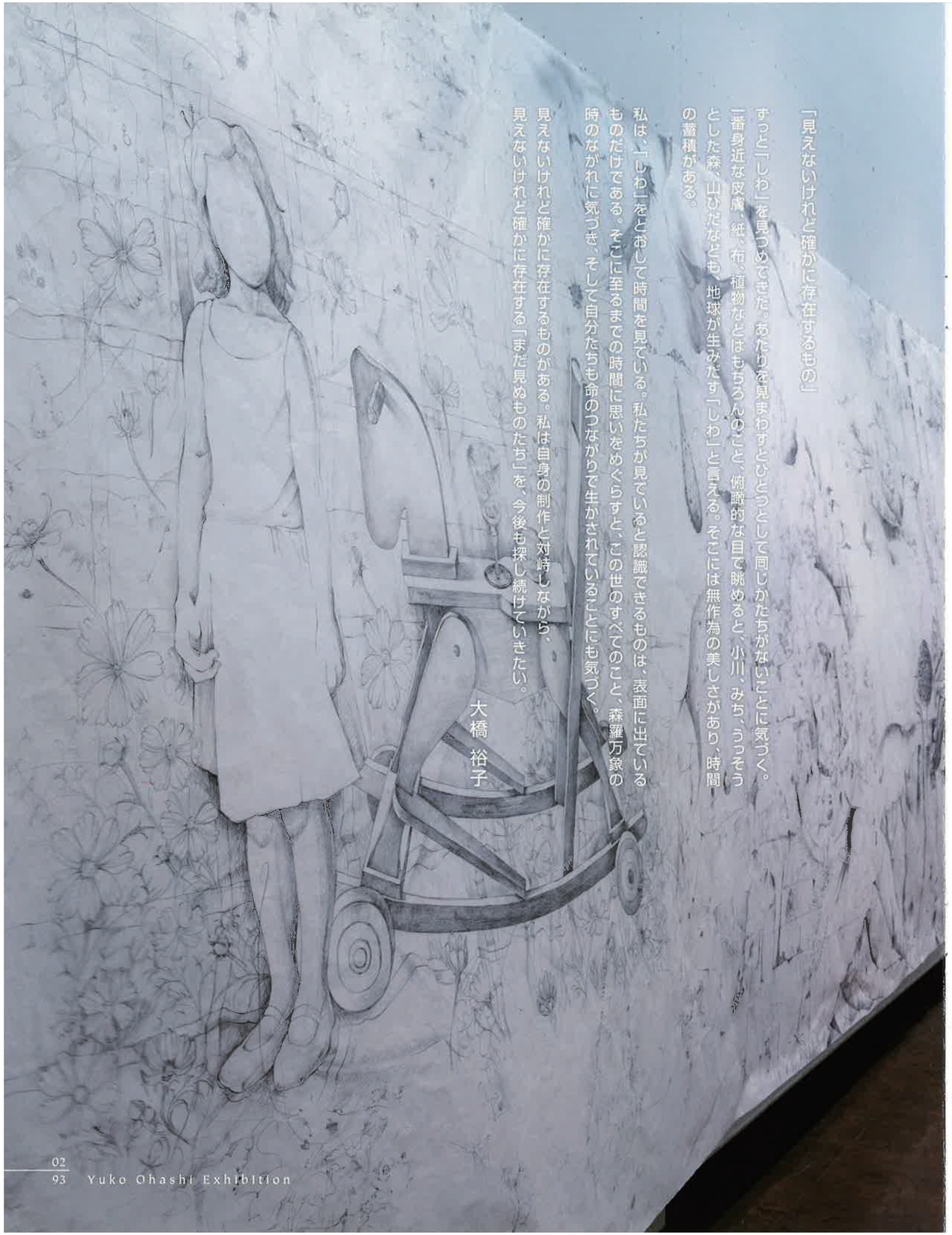
森山知己　五十嵐英之　近藤千晶　倉敷芸術科学大学
五十嵐ゼミの皆様　漆原光展　西日本機工（株）　（株）アムス

2020年度
岡山県天神山文化プラザ企画展
天プラ・セレクション Vol.93
大橋裕子展 記録集

主 催：岡山県天神山文化プラザ
指定管理者:公益社団法人岡山県文化連盟
助 成：岡山県天神山文化プラザ文化振興会

発 行：岡山県天神山文化プラザ
岡山県岡山市北区天神町8-54
TEL.086-226-5005
発行日：2020年10月31日
印 刷：株式会社 三浦印刷所

編 集：加藤 淳子［岡山県天神山文化プラザ］
デザイン：鳥越 眞生也［鳥越屋］
撮 影：加賀 雅俊［べあもん］



「見えないけれど確かに存在するもの」

すっと「しわ」を見つめてきた。あたりを見まわすとひとつとして同じかたちがないことに気づく。一番身近な皮膚、紙、布、植物などはもちろんのこと、俯瞰的な目で眺めると、小川、みち、うっそうとした森、山ひだなども、地球が生みだす「しわ」と言える。そこには無作為の美しさがあり、時間の蓄積がある。

私は、「しわ」をとおして時間を見ている。私たちが見ていると認識できるものは、表面に出ているものだけである。そこに至るまでの時間に思いをめぐらすと、この世のすべてのこと、森羅万象の時のながれに気づき、そして自分たちも命のつながりで生かされていることにも気づく。

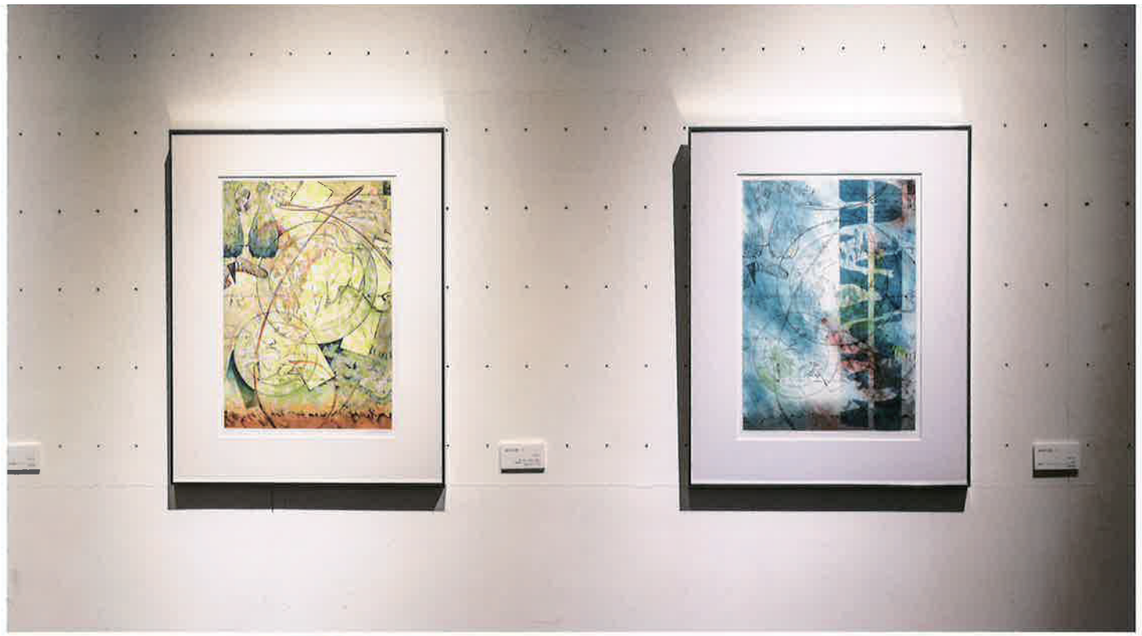
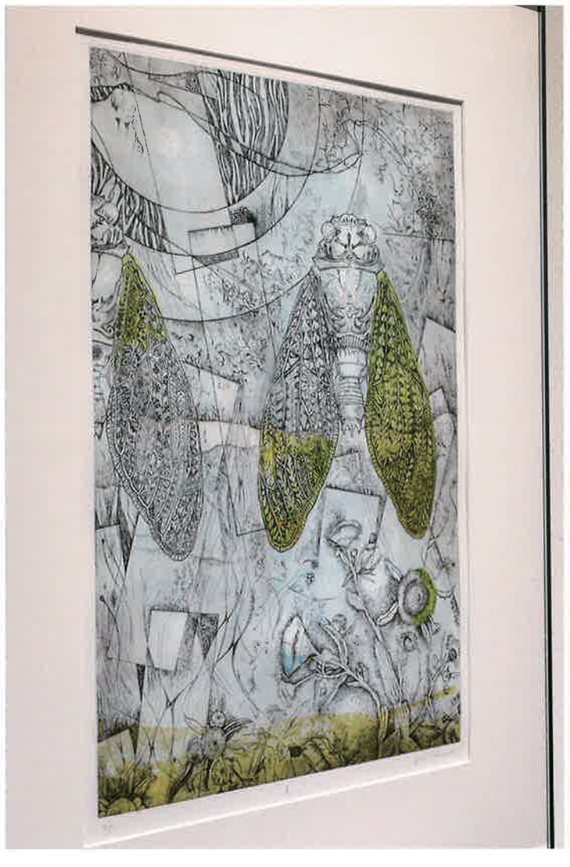
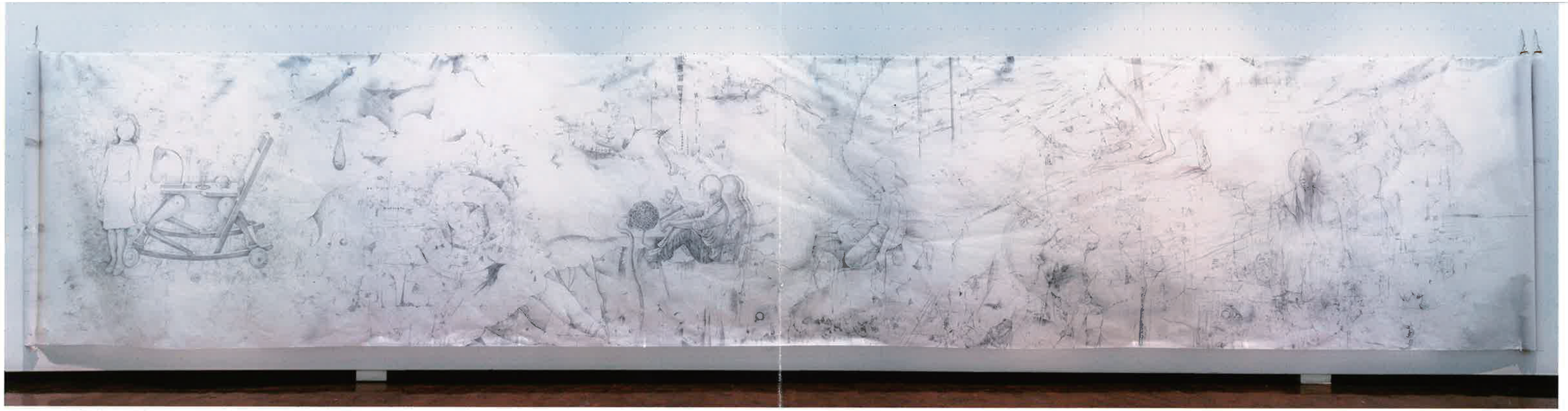
見えないけれど確かに存在するものがある。私は自身の制作と対峙しながら、見えないけれど確かに存在する「まだ見ぬものたち」を、今後も探し続けていきたい。

大橋 裕子

Exhibition Review

絵を描く人にも様々なタイプがある。
生み出すものがそのまま溢れ出る個性そのものというのは、憧れるスタイルではあるがなかなか難しい。一方、個性的にありたい、あらねばと思って描く絵が単なるポーズとはならないように、自身を自ずと導く仕掛け、作法をあえて加える者もいる。素材の選択に伴って不可避の物理法則や、もしくは容易に自由にならないものを制作プロセスの中に持ち込むのである。ある種の抵抗を媒介とすることで、より確かな自己を発見する手法と言ってもよいだろう。こうした行為を作為的と距離を置く場合もあるが、絵を描く行為自体が作為的かどうかと問われた時、逆に作為的では無いとはいったいどういうことなのかという問が湧いてくる。ある意味で絵描きがその問から逃れるための手法として、それはある。

「彼は、よい顔になった。」などと聞くことがある。「よい顔」とは、自らのありたい姿・ビジョンに他ならない。刻まれた顔の「しわ」は、その判断において重要な要素である。
笑うこと、泣くこと、怒ること‥‥生きることの積み重ねによって刻まれた「しわ」である。「しわ」は、過ぎた時の痕跡であり、心の記録でもあるのだ。「もみ紙」に見られる無数の「しわ」は、丈夫な和紙を文字通り揉むことによって作りだされる。そのもみ紙の技法によって現れた「しわ」を拾い、それを手掛かりに筆を重ねて絵画を生み出していく作業は、さながら人生のようにも思える。

絵を描く行為は、これまで過ごしてきた時間や自らを取り巻く世界と無関係ではいられない。大橋の作画手法は、それらと自身の関係の結び方のように思える。無数の「しわ」の中から、感じ取り、選び出した「しわ」を手がかりに筆を入れ、「まだ見ぬ何か」に近づける作業を延々と行っている。ひたむきな作業である。はたしてゴールは見えているのか、まだ見ぬ世界を探している。
描かれた結果としての絵画は、その時点での作者自身であり、作者が刻んだ新たな「しわ」に他ならない。大橋にとって描く行為は、自らが思い描く「良い顔」を作り出す作業にも思える。

岡山県天神山文化プラザ企画委員 / 美術家　森山 知己